

日露の最初の本格的な外交交渉 —ゴロヴニンの¹⁾『日本幽囚記』を読む—

荒川 オクサナ

1. はじめに

歴史的に、日本は北へ、ロシアは東へ領土を拡大し、日本とロシアは17世紀半ばまでには国境を接する隣人になった。

1697年、ロシア人はカムチャツカで日本人漂流民デンベエと会った。その後デンベエはサンクトペテルブルグで日本語を教えた。

1730年代に薩摩出身の漂流民、ゴンザがサンクトペテルブルグで初の露日辞書を作った。ゴンザは1739年サンクトペテルブルグで亡くなった。21歳だった。

1783年、船が難破し、アリューシャン列島に漂着した海運業者、大黒屋光太夫は、その後、ユーラシア大陸を横断し、サンクトペテルブルクで女王エカテリーナ二世と謁見した後、1792年に帰国した。

1785年には幕府が派遣した最上徳内が択捉島でロシア人と会う。彼らは短い期間いっしょに過ごし、強い友情で結ばれた。

ロシアは1778年と1792年の2回使節団を送り、日本に交易を求めるが断られた。日本がロシアと日露和親条約を締結するのは1855年のことである。

2. ゴロヴニンと『日本幽囚記』

1811年、千島列島で測量を行っていたロシアの軍艦ディアナ号の艦長ゴロヴニンと

1) キリル文字“Василий Михайлович Головнин”，ローマ字“Vasilii Mikhailovich Golovnin”。日本語による表記は「ゴローヴニン」「ゴローニン」などいろいろあるが、ここでは、原語の発音にもっとも近い「ゴロヴニン」とする。

その部下たちが国後島でだまされて捕まる。

彼らを釈放するため活躍したのが、副艦長のリコルドと淡路島出身の船頭、高田屋嘉兵衛である。二人の活躍は、司馬遼太郎の小説『菜の花の沖』に詳しく書かれている。

また、2年3ヶ月にわたった拘留の様子は、ゴロヴニンの『日本幽囚記』に詳しい。今回はこの本について紹介し、考察したい。

ゴロヴニンらの抑留が長期にわたった理由をあらかじめ述べておく。理由の第1はこの時代の船は動力がなく風が頼りであること、第2は冬のオホーツク海は氷結して、航海できなくなることである。

原著は1816年に出版された。原題は“Записки флота капитана Головнина о приключениях его в плену у японцев в 1811, 1812 и 1813 годах : с приобщением Замечаний его о японском государстве и народе”, 「1811年, 1812年, 1813年の日本抑留という冒険についてのゴロヴニン艦長の日記：日本国とその国民についての覚書とともに」という意味である。この本は昭和と平成の時代に3回翻訳された。それらは次の通りである。なお、①②は絶版である。

- ①『日本幽囚記 上中下』井上満訳, 岩波文庫 1943-1946
- ②『日本俘虜実記』『ロシア士官の見た徳川日本 続・日本俘虜実記』
徳力真太郎訳 講談社学術文庫 1984-1985
- ③『日本幽囚記 ゴロヴニン艦長の手記 1811, 1812及び1813年 I II III』
斉藤智之訳 私家版, 2018
- ④『対日折衝記 1812年と1813年における日本沿岸航海と日本人との交渉』
リコルド 著 斉藤智之訳 私家版, 2018

筆者はまず原著を読み、必要な箇所を①の翻訳から引用した。なお、旧仮名遣い、旧字体はすべて新仮名遣い、新字体に改めた。

それでは、事件の顛末を詳しく見ていこう。

3. 国後島での捕縛

1811年、ゴロヴニンは、ディアナ号で測量のため国後島を訪れる。ゴロヴニンは日本人と話し合うため、少数の部下たちとボードで島に上陸し、岸辺のテントの中で島の隊長と会う。ゴロヴニンは不吉な予感を感じ、船に帰ろうとする。

「そして帰ろうと座を立った。すると今まで穏やかに、気持ちのよい話振りをしていた隊長が、急に語調を一変して、大声を發し、熱をこめて話し出し…何度も刀に手をかけた。」

「われわれは直ちに陣屋から駆け出した」

「拔身の大刀や、小銃や、槍を持って駆け寄って、ボートの傍らのわれわれを包囲してしまった。私はこれを見て…降服した。」 (ゴロヴニン 1943 (上) : 144)

こうした日本側の対応には伏線がある。ロシア軍人フヴォストフが1806年に樺太の、1807年に択捉島の日本軍駐屯地を襲撃し、略奪を行った。このため、日本側はロシアに対し、強い警戒感を持ち、北海道や樺太、千島などに軍隊を送った。

ゴロヴニンと、いっしょにボートで上陸した士官2名、水兵4名、それに千島先住民1名、合計7名が捕まった。

ゴロヴニンたちはとても強く縛られ、函館に連れて行かれる。途中、彼らは遠くにディアナ号を見る。このときの様子をゴロヴニンは次のように書く。

「高見に登ると、ディアナ号が帆を上げているのを発見した。その光景は、まさに断腸の思いであった。そして、後から来ていたフレイブニコフ君が、『艦長、見納めにディアナ号を御覧なさい!』と声をかけた時には、苦悩が私の全身の血管をかけ巡った。」

(ゴロヴニン 1943 (上) : 148)

ゴロヴニンたちは、6月5日に国後島を出発し、7月2日に函館に到着した。交通手段は、徒歩、籠、船だった。彼らは途中、多くの、好奇心旺盛な、同情的な日本人たちに会った。

ゴロヴニンはだまされてつかまったのだから、日本人が大嫌いになるはずである。しかし、彼はとても心が広く、冷静な人で、日本人のいいところをきちんと評価する。彼は、函館に行く途中の経験を次のように書いている。

「一つの村に入る時も、出る時も、われわれは物見 高い老若男女に取り囲まれた。しかしわれわれを侮辱したり、嘲笑したりする者は一人もなく、みんな同情をこめてわれわれを眺め、中には心からの憐憫の情を浮かべる者もあった。ことに婦人たちがそうで、われわれが水がほしいと言うと、彼らは我さきに世話をやこうとするのであった。」

(ゴロヴニン 1943 (上) : 175)

彼らが日本人たちに悩まされたことがある。士官のひとりムールは絵がうまかったので、日本人たちが後から後からやってきて、絵を描いてくれと頼んだ。また、士官たちにロシア語のアルファベットを書けとか、日本語の「いろは」をロシア文字で書けとか、ロシアの数字を書けとか、いろいろな要求をした。中には扇子を10本も持って来る者もいた。

日本人たちは水兵たちにも字を書いてくれと頼んだ。彼らが字を書けないと知って日本人はたいへん驚いた。この時代、ロシアの貧乏な人たちは教育を受けることができなかった。

彼らが捕らわれているとき、彗星が現れる。ゴロヴニンは次のように書く。

「日本政府が我々の返答、申告をどう考えるか、我々をどう処分するか、まったく不確かであった。残酷な運命が我々を待っているように思えた。地上での一連の不幸な出

来事とともに、天空の現象も我々の将来に対する不安感をさらに強いものにした。彗星が現れたのである。」（ゴロヴニン 1943（上）：254）

実は、この彗星がトルストイの『戦争と平和』の中にも描かれている。

15歳のナターシャは女たらしのアナトーリーにだまされて、駆け落ちしようとして失敗する。その結果、アンドレイとの結婚もだめになる。ピエールは失意のどん底にあるナターシャを見舞うため、パヴァールスカヤ通りにある邸宅を訪ねる。ここでピエールはナターシャに初めて求愛する。

なお、本文に「1812年の彗星」とあるが、これはトルストイの勘違いで「1811年」が正しい。

『家へ』ピエールは零下十度の寒さだというのに、うれしく息づいている、広い胸の上のクマの毛皮コートをはだけながら、言った。

凍てつく寒さで、澄みとおるように晴れていた。－中略－アルバート広場に入る所で、暗い星空の巨大な空間がピエールの眼前に開けた。その空のほぼ真ん中あたり、プレチスチンスキー並木通りの上の方に、ちりばめられた星に四方から取り巻かれて、地上への近さと、白い光と、長い、上に突き立つ尾とで、どの星よりひときわ目立つ、巨大な、光まばゆい1812年の彗星が…あらわれた。」（トルストイ2014：484）

18世紀にニュースは人の移動スピード以上のスピードでは伝わらない。サンクトペテルブルグから極東までの移動には8ヶ月かかった。特に、シベリアの移動はとてつもないへんだった。ゴロヴニンが日本に囚われていたとき、ナポレオンがロシアに侵入していた。その戦争の様子について、断片的な、不確かな情報が途切れ途切れに入ってくるだけで、ゴロヴニンはニュースが入ってくるたびに一喜一憂した。

それでは、本題に戻る。

函館でゴロヴニンらは「長官」の訊問を受ける。フヴォストフらの襲撃はロシア政府の命令であったかどうかについてしつこく聞かれる。

彼らは8月22日、函館を出発し、25日に松前に着く。彼らのために新しく作られた牢屋に入れられる。

4. 松前での訊問

松前では奉行の訊問を受ける。フヴォストフ事件についての話が中心なのだが、奉行は好奇心が強く、ロシアの風俗について、たくさん質問する。

奉行の質問はたとえば次のようなものである。

- ・ロシアの皇帝はどんな着物を着ているか。
- ・今あなたが着ている衣服はいくらか。
- ・あなたたちの給料はいくらか。
- ・何年働いているか。
- ・どうして昇進できたのか。
- ・ロシア人は一日に何度教会に行くか。

ゴロヴニーンはだんだんうんざりしてくる。

『何のためにこんな空疎な質問で私を苦しめるのだ。一体そんなことを知って何になるのだ。』 - 中略 -

しかし、奉行はやさしく言った。

『いや、珍しいからたずねたのだから、怒らなくてもよい。何もしないで返事を求めるのではなくて、友達としてたずねたまでだ。』

こんなに丁寧に出られると、われわれはすぐに気が静まって、不遜な返答をしたのを気の毒に思い、またていねいに返事をするようになるのであった。奉行はまた二三事務的な質問をして、またばかな質問を出して、再びこちらを怒らせてしまう。…毎日三四回は喧嘩をしたり、仲直りをしたりしていた。(ゴロヴニーン 1943 (上) : 284)

ゴロヴニーンは、松前での幽閉の期間に起きたある「事件」について述べている。

「食事の監督をしていた役人は、60歳位の老人であった。彼は極めて優しい態度を示し、『きっと帰国出来ますよ』とたびたび言っていた。ある時その老人がわれわれ三人に立派な衣裳の日本女を描いた、三枚の絵を持って来てくれた。 - 中略 - 実際それは非常に醜悪な絵で、少なくともヨーロッパ人には噴飯物で、嫌悪の情より他に何も起こさせない代物であった。」 (ゴロヴニーン 1943 (上) : 301)

老人はどんな絵を持ってきたか？ゴロヴニーンは明記していないが、筆者は、老人は春画を持ってきたとらんでいる。

5. 無罪宣告とムールの裏切り

1811年10月16日、ゴロヴニーンたちは無罪を言い渡される。

「奉行の前に出る前から、通詞も番卒も人夫も非常な上機嫌で、『お奉行からよい知らせを申し渡されますよ』と言っていた。」

「奉行は席につくと、 - 中略 - 『フヴォストフの独断専行のことや、一同の来航目的がなんら悪い意図に出たのでないと書いたのは、全部事実に相違ないか』とたずねた。」 (ゴロヴニーン 1943 (上) : 315)

奉行は概ね次のような内容の「演説」を行う。

「私たちはゴロヴニンらが、フヴォストフらと同じように日本の村を襲撃するつもりで来たと思っていた。そうではないという弁明、および、フヴォストフの蛮行は彼らの独断専行によるものだという申し立てを信用する。あなたたちを無罪と認め、縄を解き、待遇を改善する。ただ、最終的な認可は将軍が行うので、それを待ちなさい。」

しかし、これからが長かった。

奉行の命令で、村上貞助という25歳ほどの青年がロシア語を学ぶことになる。

「貞助はロシア語学習の第一日から珍しい才能を示した。彼は記憶力も強く、理解力も抜群で、ロシア言葉の発音能力も並はずれてい(た。)」

(ゴロヴニン 1943 (上) : 324)

彼はその後ゴロヴニンらの強い味方となる。

監禁状態が続き、将来に強い不安を持ったムール少尉は仲間を裏切り、日本側に受け入れてもらおうとする。その様子をゴロヴニンは次のように書く。

「ムール君はわれわれに対して、態度を一変し、接触を避け、口もきかず、こちらから何かたずねても、簡単に答え、つけんどんな返事をするかもしれないであった。その代り日本側に対しては極めて丁重になった。－中略－ムール君は－中略－日本の習慣をまね、役人に対してはまるで上官に対するような態度を取り出した。そして、日本の作法をまねては、当の日本人たちをしばしばあきれさせたり、笑わせたりするのであった。」

(ゴロヴニン 1943 (上) : 365)

ムールは帰国後自殺してしまう。

ゴロヴニンは手記の最後の方で、ムールがロシアに帰った後、死を選ぶまでの苦みを詳しく述べる。彼の死後、ディアナ号の乗組員たちはみんなでお金を出し合ってお墓を立てた。それには次のような言葉が刻まれた。

「氏は日本において人生行路の守護天使に見放され、絶望の余り過誤に陥った。惨酷な後悔はその罪を償い、死は遂にこの不幸な霊を安んじた。」

(ゴロヴニン 1943 (上) : 246)

司馬遼太郎は『菜の花の沖』の中で、ゴロヴニンのムールに対する態度について次のように書いている。

「ゴロヴニンは『日本幽囚記』のなかで、ムール少尉の変節についてくわしく書いている。ただし、文章にすこしの攻撃的なおいもないばかりか、後輩の意外な変節をどう理解していいか当惑しきっている姿勢しか感じられない。」

(司馬遼太郎1982 (5) : 314)

ゴロヴニーンのムールに対する態度は、彼の人格の高潔さ、寛容さを表す良い例であると考えられる。

筆者は、ムールの生涯を見て、遠藤周作の『沈黙』に登場するキチジローを連想する。キリスト教を捨て、神父を裏切ったキチジローは次のように言う。

「俺は転び者だとも。だとて一昔前に生れあわせていたならば、善か切支丹としてハライソに参ったかも知れん。こげんに転び者よと信徒衆に蔑（みこ）なされずにすんだでありますように。禁制の時に生れあわされたばっかりに…恨めしか。俺は恨めしか。」

（遠藤周作 1988：152）

「俺は生まれつき弱か。心の弱か者には、^{マルチルノ}殉教さえできぬ。どうすればよか。ああ、なぜ、こげん世の中に俺は生れあわせたか。」

（遠藤周作 1988：214）

ムールもこのような運命にもあそばれることにならなかつたら、有能で快活な軍人として幸せな人生を過ごしていたはずだ。

彼は地獄に落とされたのだろうか？もしそうなら、神は公平ではない。

6. 脱走

1811年10月、奉行はゴロヴニーンたちを釈放することを決めるが、その後進展がぜんぜんない。それで、ゴロヴニーンたちは1812年3月、脱走する。

彼らはいへんな危険を冒し山の中を歩き回る。逃げる途中でゴロヴニーンは足をけがしたため、歩くのがとても難しくなる。状況は絶望的になる。

そのような苦境の中で、彼は全編中の白眉と言えるような美しい描写をする。

彼らは山の中の小屋でさらに一晩過ごす。夜明け前、ゴロヴニーンは一人で小屋の外に出る。

ゴロヴニーンはそのときの様子を次のように書く。

「横手の立ち木に寄りかかって、自由に物思いにふけた。まず私の注意を引いたのはあたりの荘厳な光景であった。空はよく晴れていたが、足の下の方から峰を黒雲が流れていた。下界では雨が降っていたのだ。あたりの山々はすっかり雪が積もって、非常にはっきり見えた。私はその夜のように星があざやかに光るのを見たことは一度もなかった。」

（ゴロヴニーン 1943（中）：20）

彼らは7日間にわたって逃げるが、結局捕まえられ、松前に送られる。

護送隊の中に彼らが脱走した晩の責任者がいた。

「彼はわれわれを追跡した追手の一隊に加わっていたが、もはや同心ではなくて、ただの平人足に位を下げられていた。そして再び縛についた瞬間から、松前に到着するま

で、ずっとわれわれに付き添っていた。ひげも髪ものび放題で、顔色も青ざめ、われわれのおかげで彼のこうむった悲哀を物語っていた。しかし初めて顔を合わせると、彼は愛想よく頭を下げ、怒ったり憎んだりしている様子は少しも見せなかった。」

(ゴロヴニン 1943 (中) : 72)

ゴロヴニンは、この同心の善良さを描いているが、その描写は鏡のように彼自身の善良さを反映している。

ゴロヴニンたちは松前で奉行に訊問される。そして、ふつうの牢に入れられる。そこで彼らは日本人の犯罪人たちを見る。その中の一人の犯罪は、銭湯で自分の粗末な着物を残し、まちがえたようなふりをして、他人の上等な着物を着て帰ったことだった。

7. 高田屋嘉兵衛の誘拐

1812年8月、ディアナ号が国後島に現れ、高田屋嘉兵衛を誘拐し、カムチャツカへ連れ去る。リコルドはこのとき初めてゴロヴニンたちが生きていることを知る。

1812年の終りごろ、幕府はフヴォストフ事件がどうして起きたかロシア側がきちんと説明することを条件として、ゴロヴニンらを釈放することを決める。

1813年6月、ディアナ号がまた国後島に来る。ゴロヴニンが捕まったあと艦を指揮していた副艦長のリコルドは日本側と交渉するため高田屋嘉兵衛を上陸させる。

1812年から1813年にかけてのカムチャツカでの越冬は過酷であった。この間に、リコルドと嘉兵衛はとても強い友情で結ばれる。嘉兵衛は誠実に役目を果たし、遂にゴロヴニンたちの釈放が決まる。

水兵がゴロヴニンらの無事であることを伝えるため国後島に派遣される。ゴロヴニンは事前に水兵に日本の軍隊の様子、万一戦争になったときの攻撃のしかたなどをしっかりと覚えさせた。

しかし、純朴だが愚鈍な水兵はディアナ号に到着したときにはすべてを忘れていたそうである。

ゴロヴニンらは監禁を解かれ、「立派に造作のとどいた家」

(ゴロヴニン 1943 (中) : 180)

に移された。そして、賓客としての扱いになり

「食事は、きれいな漆塗の器に盛った御馳走を、立派な服装をした少年たちが、いつも礼儀正しく給仕してくれた。」

(ゴロヴニン 1943 (中) : 181)

「この家に移るとすぐに、いろいろの役人たちが子供をつれて訪ねて来て、祝意を表し、別れを告げた。」

「訪ねて来た日本人たちは皆、今回の幸福について心からの満足と嘉悦を浮かべてい

た。人間愛に富んだこの日本人の態度には、涙の出るほどの感動を受けた。」

(ゴロヴニン 1943 (中) : 181)

ゴロヴニンたちは、奉行に感謝状を書き、日本語に翻訳して奉行に届けた。奉行はこの手紙を受け取り、彼らのやさしさに感激した。

1813年8月、ゴロヴニンたちは日露の交渉が行われる函館へ移動する。移動の途中で、ロシア皇帝を讃える祝日が来る。このことを日本側に伝えると、いい酒を用意してくれた。ゴロヴニンたちが皇帝の健康を祝って乾杯する。その掛け声の意味がわかると、日本側もそれをまねて、乾杯した。

“Да здравствует, император Александр!” 「アレクサンドル皇帝の健康のために！」という意味である。

8. 会見の準備

帰国を前にして、ゴロヴニンたちは日本人の通訳者、学者たちといっしょに仏露辞典のロシア語での説明を日本語訳する。将来の露日交流のためである。途中で日本側は意味の理解をとて難しく感じるがよくあった。

「日本人たちはそのたびに小首をかしげ、『ムスガシ・コドバ、ハナハンダ・ムスガシ・コドバ』と言った。」

(ゴロヴニン 1943 (中) : 188)

1813年8月、ディアナ号が函館に到着する。ゴロヴニンらの釈放をめざすディアナ号副艦長リコルドは高田屋嘉兵衛を仲介人として、会見のプロトコルを決める。リコルドは嘉兵衛について次のように言う。

「この多幸な場合において多くの点で与って力あったのは、寛容で開明的な高田屋嘉兵衛であるといわねばならない。彼を介して日本官憲とのこの最初の会見が行われ、明敏な嘉兵衛の頭があったればこそ、物事について全然正反対の概念を持つ二つの民族が、それぞれの頑強な、希望をまげて、共通の利益のために合意できたのである。」

(ゴロヴニン 1943 (下) : 340)

嘉兵衛とリコルドは会見でのいすの順番、おじぎの方法などいろいろなことを細かく決めた。この会見で、リコルドは日本側にフヴォストフ事件が起きたことは残念であると書いた手紙を渡し、日本側はゴロヴニンたちの釈放を宣言することが決まった。会見の直前、とても小さいことが大きな問題になった。それは、リコルドたちが会見場で靴をはくか否かという問題である。

この問題を嘉兵衛は次のように説明する。

「接見の間はきれいな敷物を敷き、その床の上に当の両長官も着座されるのだが、皆さんはその部屋に靴履きのまま入るのかね。土足で家に入るのは、日本古来の習慣に反し、この上もない失礼だ。だから皆さんは控室で靴をぬいで、靴下だけで接見の間に入ってもらわねばならん。」
(ゴロヴニン 1943 (下) : 330)

リコルドにとって、これは驚嘆すべき要求だった。

「これはヨーロッパ人にとっては思いがけない奇怪な要求で、私はびっくりした。」
(ゴロヴニン 1943 (下) : 330)

ロシア側は会見での手順に靴をはいたまま入るといった項目を入れることなど考えつかなかった。日本側も靴を脱いで入るといった項目を入れることなど考えつかなかった。どちらにとってもそれは当たり前のものでありすぎた。

結局、この問題は、リコルドたちが会見の直前、控え室で長靴を短靴にはきかえ、この短靴を日本側は黒足袋と考えることで解決した。会見は打ち合わせ通りに行われ、無事に進行する。

ゴロヴニンにロシア語を習った村上貞助がはっきりしたロシア語で通訳を行い、リコルドを驚かせる。

会見の後、ゴロヴニンらは釈放され、ディアナ号に帰還する。

9. ディアナ号への帰還

嘉兵衛はディアナ号にやって来て、ディアナ号にたくさん酒を持って来て水兵たちにごちそうし、リコルドや水兵たちにさよならを言った。

彼は言った。

「大将（リコルドのこと）！日本の水主もロシアの水主もおんなじだよ。みんな酒が好きだよ。」
(ゴロヴニン 1943 (下) : 348)

そして、衣服などいろいろな物を記念に贈った。

一方、嘉兵衛は銀のスプーン、ナイフ、食器と、ロシアのサモワールをもらった。

「『これはお国で親切なもてなしを受けたことを思い出し、時にはロシア風にわしの友だちをもてなしてやりたいからですよ。』と彼は言った。」

(ゴロヴニン 1943 (下) : 350)

嘉兵衛はリコルドたちと夜遅くまで楽しく話した。ディアナ号を離れる時、嘉兵衛は自宅にリコルドたちを招けないのはとても残念だと言った。

ディアナ号が出発する前、日本側はたくさんの小舟で、水と薪と食料品を届けてきた。これについてリコルドは次のように書いている。

「多数の日本人が進んで積込を手伝ってくれた。その光景は、かつて一度もなかったほど晴れ晴れとしかも熱心に働くわが水兵たちの威勢のよい活動ぶりと、進んで手伝う日本人たちの仕事ぶりと、どちらに感心してよいか判らないほどであった。思想も教養も無限に異なり、その生国においては地球の半分も相隔たった人々が、この時ばかりは一つの民族に生まれ変わったかと思う程であった。」（ゴロヴニン 1943（下）：356）

10. 出帆

最後の別れをリコルドは次のように書く。

「ちょうど順風が吹き出したので、私は信号をあげて、出帆の意味を伝えた。すると尊敬すべき高田屋嘉兵衛が、本艦を内港から沖へ曳舟するため、多数の小舟を従えてやって来た。－中略－

湾口では別れに臨んで…、広量で開けた高田屋嘉兵衛に対して、感謝と敬意を表すため、全乗組員は殊のほか力を入れて、『大将、ウラー！』を三唱した。熱心なわが友嘉兵衛は、手下の水夫たちを従え、乗って来たはしけの一番高いところに立って、大空に向かって手を突き上げながら、力一杯に『ウラー！ディアナ！』と叫ぶのであった。」

（ゴロヴニン 1943（下）：358）

「ウラー」というロシア語は日本語の「ばんざい」に相当する。ディアナ号の乗組員はずっと高田屋嘉兵衛といっしょに生活し、彼に親しい気持ちと尊敬する気持ちの両方を持った。それで、彼のことを日本語で「大将」と呼ぶようになった。

11. 最後に

ゴロヴニンの著作は彼の特異な経験を詳細に描く記録文学の傑作である。コスモポリタンの知性を持つゴロヴニンは、日本側にだまされ、拉致されたにもかかわらず、日本人を好意的に描く。偏見にとらわれず、「敵」をも公平に客観的に描写する知性は、19世紀の作曲家ボロディンにも見られる。彼のオペラ『イーゴリ公』は、ロシアの宿敵、^{だったん}韃靼人の王を血の通った人間として描いた。

チャイコフスキーのオペラに「イオランタ」という作品がある。盲目の姫君とそれを守る人々の話である。このオペラでは、登場人物がみんな善人という現実にはありえない状況描かれている。

ところが、このような、現実離れた状況が、日露の最初の本格的な外交交渉となった

ゴロヴニン事件解決の過程で現れた。この事件の主要人物であるゴロヴニン、リコルド、高田屋嘉兵衛はみな善良な、誠実な人たちであった。

ゴロヴニンはその高潔な人柄のため、日本人たちとの間に徐々に信頼関係を築いた。

高田屋嘉兵衛は当初ゴロヴニン解放のための人質として誘拐された。にもかかわらず、誘拐の当事者である副艦長リコルドとカムチャツカでの越冬の間に強い友情と信頼関係で結ばれた。二人は問題を平和的に解決するため大活躍する。

善良で誠実な日本人と、同じように善良で誠実なロシア人がそれぞれの立場で深刻で複雑な問題に対し真剣に取り組み、日露の最初的外交交渉は大団円を迎えた。

上首尾に終わったこの交渉を現在の国際情勢と比較するとき、筆者の思いは複雑である。今回の事態において、どちらに非があるかはもちろん一目瞭然である。できれば、あの方にゴロヴニンの爪の垢を煎じて飲ませたい。

一方、国と国の関係は日本人とロシア人の個人と個人の関係に影響を及ぼしてはならない。ロシア雑貨を扱う店やロシアレストランに対する嫌がらせ行為が頻発しているというニュースを聞いたとき筆者の心は痛む。

日本とロシアは上に述べたように17世紀末からの長い交流の歴史がある隣人同士である。しかし、現代史において生じた事件のために日本におけるロシアのイメージはそもそも良くなかった。そのため、日本人にはロシアについて、いわば「食わず嫌い」のようなところがある。このような時期だからこそ、あらためて隣人の在りようについて見つめなおす機会を持つことも大切ではないか。

引用文献

遠藤周作『沈黙』新潮社、1988年。

ゴロヴニン『日本幽囚記』井上満訳、岩波書店、1943年（上）、1943年（中）、1946年（下）。

司馬遼太郎『菜の花の沖5』文芸春秋、1982年。

トルストイ『戦争と平和』藤沼 貴訳、岩波書店、2014年、第3巻。

参考文献

Головнин, В.М. «Записки флота капитана Головнина о приключениях его в плену у японцев в 1811, 1812 и 1813 годах : с приобщением Замечаний его о японском государстве и народе», 1816, Национальная электронная библиотека (НЭБ) (accessed 2022.07.04) <https://rusneb.ru/catalog/000199_000009_004431745/>

Л.Н. Толстой «Война и мир», 1863-1869, Интернет-библиотека Алексея Комарова (accessed 2022.07.04) <<https://ilibrary.ru/text/11/index.html>>

Эндо Сюсаку «Молчание», пер. Дуткина Г. Б., Львова И. Л. 1991, LibreBook электронные книги онлайн (accessed 2022.07.04) <https://librebook.me/silence_siusaku_endo/vol2/1?mtr=true>

謝辞

本論文の執筆にあたり、敬愛する夫が日本語のテキストについて様々なアドバイスを与えてくれたことに感謝する。